

う。船内は和やかなものだ、苦勞が多かっただけに喜
びも大きい。そして函館港に着いた。

全員上陸を許可されて二年半ぶりに日本の土を踏む
ことができました。モンペ姿の御婦人方の出迎えを受
け、感激が込み上げてきた。

追 憶

島根県 景山利造

私は大正十一年十月九日、島根県の山間部の農家で
七人兄弟の五男として生をうけ、地元小学校を卒業後、
直ちに青年学校へ入校した。

時あたかも支那事変が勃発し、特に軍事教練が厳し
い時代でもあった。私の父もかつて日露戦争に従軍し
て外地の大連地区で参戦したことのある厳格な人であ
り、長兄は運送業など自営していたが、若くして病魔
に侵され昇天した。二男、三男は中支に出征し、三男
が早く戦死し、二男は「ノモンハン」の戦闘にも参戦

し大変な苦戦したらしく、その後南方へ転属し、つづ
いて四男も朝鮮軍へ入隊した。当時、私どもの地区で
は、出征兵士の数ほど、国旗を掲揚するきまりがあり、
庭先の国旗掲揚柱には三つの旗がひるがえり、三人の
出征兵士を送り出していることが一目瞭然とし、誉れ
高き出征軍人の家として表面的にはその榮譽をたたえ
られたが、父母は本心どんな気持ちでいただろうかと
切なる思いがする。

昭和十六年十二月十日、ついに私も現役兵として西
部第三部隊へ仮入隊して後、藤第六八五部隊へ編入
され、深夜、下関港經由の輸送船で釜山港に向かい、
日本の地を後にする。釜山から列車輸送で山海関を通
過し、支那の首都南京を通り、揚子江を船で上り、上
流地の漢口に着く。そこから部隊の駐屯地まで約一週
間、徒步行軍でようやく目的地に着いた。

我々は入隊のため民家を改造した兵舎に入ることが
できたが、時期は昭和十八年一月中旬ごろであったと思
う。

翌日から初年兵教育、訓練で鍛えられ、四月には一

期検閲が終わり、一等兵に進級した。その後、数々の討伐作戦に参加したが、その中で特筆すべきは、我が中隊は連隊の後衛となつて進軍中に本隊との連絡が取れなくなった。これは敵の仕掛けた罠にはまり、多くの戦死者を出したことだ。俗に言うミニインパール作戦と伝えられ、大失敗であり、これも功を焦った部隊長をはじめ上層部の大きな責任であつた。

その後、私は、初級幹部になるため、連隊の集合教育を受けることになり、約五ヵ月間訓練に励んだ。そしてこれが終わると、成績優秀とのことで、さらに特訓をうけるべく南京の教導学校へ入校した。入つて見ると、砲工、歩、騎、輜重、合わせて三千人の各連隊選抜の下士官候補者ばかりで、いささか気後れの感があった。そこで最も優秀なる者には総司令官から記念の銀時計が授与されるとのことだったが、この三千人中の十名とはまさに夢のまた夢だが、一生懸命頑張つたものだ。

やがて卒業となり原隊復帰し、下士官伍長に進級し、初年兵教育係、または分哨長として警備勤務に励み、

さらに幾多の討伐戦にも参加した。

その後、警備地区の交代とのことで、我が部隊は本土防衛のため日本へ帰還する命令で集結して、信陽、鄭州を通過、昼は敵機の来襲を避け、夜間行軍ばかり強いられた。行程千キロにも及び、つらく長い行軍で、黄砂にさいなまれ、黄河を渡河してさらに進む。およそ、そのころから、状況の変化というか、日本海は機雷の敷設により船舶の航行は不可能になり、合わせたかのごとく、閩東軍精鋭が南方戦線に移動したため、急遽満州に転進したが、時まさに二十年七月中旬だつた。

また、そのころ、戦況は悪化し、現地人の暴動が各地で起こり、在滿邦人は戦戦兢兢としていた。そのときに当たり、中支から戦闘経験豊富な精鋭部隊の進駐は、どれだけ邦人に心強さを与えただろうか。その意味で、地元四平街の婦人会の発起で、歓迎の芸能大会を盛大に開催してもらい、久方ぶりの日本の情緒を味わい、楽しく愉快に時を過ごすことができた。

しかし、そのころは、おぼろげながらの情報も飛び、

日本の情勢は日増しに悪化し、南方戦線も大苦戦で、王碎する島もあったとか、日本軍の不利な話ばかりである。我が部隊はソ連の進攻に備えて、毎日防空壕掘りや対戦車肉薄攻撃の訓練に汗みどろの状態が続いていた。

我が部隊には現地召集による補充兵が五十名くらい入隊してきた。私は教育係班長を命ぜられ、軽機関銃教育を担当することになる。大方は年ごろは四十歳前後、もちろん妻帯者で一家の大黒柱的存在の人ばかりで、民間でも重要な職の人が多かった。この補充兵を開戦になったこの時期に教育することは並大抵ではないと思案していた。

ところが、入隊三日目、召集兵を除隊させるとの命を受ける。喜んだのはその兵たち、這々の体で帰って行ったが、果たして妻子の待つ我が家へ帰宅できただろうか。そのころに日本は無条件降伏をしたと思われるが、敗戦の玉音放送を知る由もなく、知らぬは下級幹部と兵たちばかりであった。

その後、上官から詳しく聞かされ、啞然となり、ま

た同時にこれで日本に帰れると瞬間的に喜んだ。だが、現実はそのなにか甘いはずはなく、不安な気持ちでいっぱいになる。そして我が二三連隊の軍旗を連隊長以下全隊員が涙とともに奉焼した。やがてソ連兵が進出し、武装解除がはじまる。それと同時に所持品を強奪はするし、邦人の婦女子を横抱えにして行くのを見ても丸腰の兵隊ではなす術もなく、それに加え、満人、朝鮮人の暴徒が出没して、至るところで不穏な情勢にあった。

ソ連軍の要請により一、五〇〇名単位の作業大隊を編成し、鉄道爆破で南下できないので、黒河経由で、ウラジオストクから日本にダモイさせるとのこと、半信半疑ながら列車に乗せられ、黒河に着く。そして黒龍江を船で渡り入ソ、対岸のブラゴエシチェンスクに到着した。ここは国境の街で繁栄しており、異国情緒の漂う街であったと記憶している。そこからまた有蓋貨車の人となる。そして、戦友同士で、列車が東の方向に走っていると喜々とし、また西に向かったぞと意気消沈したりして、我々をどこへ何のために連れて

行くのか一切不明で不安な気持ちになる。我々は捕虜の身だから諦める外はないと、戦勝国ソ連のなすがままと、自暴自棄になったのも事実である。

列車は西進また西進、止まったり、走ったり、正規のダイヤがあるか、ないか全くわからず、不規則な運行が続く。私は中支出発時から小隊の連絡係下士官（軍曹）だったので、小隊員の人員把握、特に停車中の大小使の乗降には人一倍気を遣わざるを得ず、人員掌握には大変に苦労させられた。

何日かして夕暮れ近くになって、出舎の小さな駅らしいところに停車する。ブラゴエシチェンスクから、一週間くらいの日数を要したのではなからうか。

間もなく、全員下車せよとの命令が出たようだ。我々は直ちに満州から携行した荷物（生活用品、食料品、毛布等）を持って、車外に出て、整列して人員点呼をうける。自動小銃を持ったソ連人監視兵の指示に従い、周囲は大きな松の木、そして白樺の林の中の道をダワイ、ダワイの声に鞭打たれ、約七、八キロ歩いたところで隊列を止まらせられた。

後でわかったことだが、ここが我々の目的地の、チタ州ジブヘイゲンの収容所の位置であった。

収容所の外周は、柵の高さ三メートルくらい、直径十五センチくらいの丸太でギッシリと埋められ、さらに外柵の外側は有刺鉄線による鉄条網が張りめぐられ、その四隅には、望楼が一段と高く、警備兵が自動小銃を持って目を光らせていた。内部は建物らしきものは何一つなく、原野のままである。

まずは、そこで携行した天幕舎を建て夜露を凌ぐことになる。時既に九月中旬、シベリアの冬は早く、夜間幕舎裏は霜で真っ白になり、寒さに慣れない我々はこの先が思いやられたが、かくしてシベリアの一夜は屋外で明けた。

翌日は全員が原野に集合し、人員ならびに携行品の検査があり、作業の説明、分担が決められた。主として木材の伐採、馬ソリによる木材の搬出、道路の新設、抑留棟の建設、食事を作る炊事の雑役などなどの作業配分と、収容所長からノルマ達成について、通訳を通じてきびしく注意があった。

我々はもちろんやる気がないから馬の耳に念仏で、これはとても生きてダモイするなどでき得ないと、今さらながら肌で痛感した。

早速、翌日からは、その分担により作業にかかる。

既に厳寒期に向かっているので、抑留棟の建設が急務であり、まず地下一メートルから一・五メートルの穴を掘り、山から木材を切り出し、その掘った穴の上に屋根状に丸太（十センチ径くらい）を並べ、その上に掘った土を二十センチくらいかける、古代の竪穴式住居のような土饅頭形の棟（一棟三百人くらい収容）を五棟建築した。屋根に明かり取り窓を四カ所、外壁にはなかったと思う。まさに穴蔵そのものであり、昼でも暗くて話にならないが、天幕舎よりは暖かく感じた。あまりの暗さに、伐採作業の折につくっておいた肥松を持ち帰り、これを缶詰の空き缶で少しずつ燃やし照明としていた。これを各班各所でそれぞれ燃やすものだから、穴蔵式の我が住居はたまったものでなく、まるで火事場の煙を吸っているようで誠に情けない原始な生活である。作業に出て痰をすると、真黒いの

が午前中くらい出たものだ。

伐採の作業ノルマは二人一組で十立方メートルであったが、慣れないのと、空腹に加えて、やる気がないので、達成など思いもよらず、日の暮れるのを待って、やっと帰してもらったような毎日だった。それでも何とか生活に慣れたところに厳寒がやってきた。三〇度は暖かい方で、四、五〇度は常温のようで、話にならない。それに加え、食事ときたら、朝食は高粱の雑炊、箸は必要とせず、コップに一杯くらいで、腹の虫が騒ぐくらいだ。

昼食の携行食は黒パン一斤を七等分もしくは九等分だから、ほとんどの者が朝食の二食分を朝一度に食べ、夕方まで何一つ口にする食物はなかった。作業から帰って、夕食も朝と同様の高粱の雑炊を、コップ一杯分を食べるのが唯一の楽しみである。また、分配方法たるや、班員全員が注視して目を光らせているなか、黒パンを寸分差のないように正確に切らねばならない。人間こまでくると、食い意地のみで、惨めな気持ちになるのではなからうか。昔の人の言った「武士は食わ

ねど高楊枝」の言葉は思いもよらない。

夜、毛布一枚にくるみ、戦友同士で、故郷の白いお米の御飯、ボタ餅がうまかったとか、就寝時話すことは食べ物といつ日本に帰れるか、果たして帰してくれるだろうかの話ばかりだった。そして、その日、作業疲れて、シラミにさいなまれつつ寝てしまう毎日である。朝は暗いうちからの作業準備、〇〇君はまだ起きないから起こしてやろうぜと、ゆり動かしても、ピクともしない。既に冷たくなっており、度々このような事が起きた。いかんともし難く、いわゆるシラミに尊い血を吸われ、ソ連の非人道的な処遇に体力を消耗して、栄養失調症になった結果に外ならない。

また、軍隊時代の階級年次意識がいまだ残っており、亡くなる人は四十歳前後の補充兵が初年兵に特に多かったと思う。昭和二十一年嚴寒の二月、第三号棟が火災となり、数十名の戦友が焼死し、無残な光景であった。この屍を焼却せよとの命令により、山中に櫓で運び、地中は凍結して掘れないので、焚き火して凍土を溶かす作業を何回も繰り返して、やっと焼却したという嘆

かわしい事件は今も忘れ去ることはできない。

また、伐採作業中やトラックへ丸太の積み作業中の不慮の事故により命を落とした人も数多くあり、五〇〇名の大隊員のうち三〇〇名余りが望郷の念に駆られながらもシベリアの凍土に骨を埋めたのである。

やがて五月ともなれば寒いシベリアの地も春というより一挙に夏が訪れ、野山には綺麗な花が咲き乱れた。そのうち野生のタンポポ、アカザ、ニラ、山からキノコの種類など、各人山ほど持ち帰り、それを煮て少しでも満腹感を味わいたく食べたのである。ある班は、氷の溶けた川辺より芹と思い持ち帰って、みんなで食べたところ、たちどころに腹痛を起こし、全員（十五名）が死に至り、食べたい一心とはいえ、誠に痛ましい事故が発生した。

そのころには、将校は別の収容所に移され、軍隊意識は影をひそめ、軍人としての階級はなくなった。ところが、民主友の会（後に反ファシスト委員会に拡大改名）なるものが発足し、共產主義的思想の普及と教育が始まりだした。したがって、役職を決めるのは、

すべて選挙となり、私も小隊長的役から解放されると喜んだが、結果は同じく小隊長の長となり、相変わず世話をする事になった。当時から日本新聞なるものが発刊になり、週一回程度配付を受ける。

そのころ、地下組織より浮上した、徳田、野坂、袴田ら各氏の執筆も多くあった。我々はその記事よりも新聞紙の方が貴重品だった。なぜなら、たばこの巻紙用とか大使のときの後始末用とか、その利用価値は極めて高い。我々、ノルマを達成しても、金品はもちろん何一つ報酬を受けたことはなく、ただ牛馬のごとく重労働をさせられた。

私どもは入浴はおろか洗面などしていなかったので、夏の到来とともに、川辺で体を洗い、サッパリし、生き地獄より解放されたような気分になったのもこの季節だった。また、このころだったと思うが、ソ連軍から日本の国技である相撲大会を公開せよとのことで、体力に自信のある者が選手となり、盛大に楽しく大会は終わった。ところがソ連の狙いは別の目的があったようで、これだけの体力があればと、翌日からさらに

ノルマの上乗せが強要された。実に巧妙な手段で体力を測定させたものと地団太踏んでも、後の祭だった。

再々、小隊（三十人前後）の責任者となり、一番苦勞したことは、小隊員の作業の割当てである。一日の重労働を終えて帰り、ホッとする間もなく、特に重労働である伐採（二人一組）、馬を使つての木材搬出、トラックの丸太積込み、軽作業として道路の新設または補修作業等、出夫割当てに基づき、人員を配分しなければならなかった。各人の体力と経験、健康状態も熟知し、あるいは二人一組の伐採作業は共同のため、相性なども勘案した作業割当てをしなければならなかった。

したがって、他の人を重労働につけて、私が軽作業をするなど絶対にできないため、毎日重労働の伐採作業が主であった。前に述べた反ファシスト委員会の活動もいよいよ活発化し、かつての戦友も、スターリンも、軍人も、地方人も同志と呼称せよとのことで、例えば同志スターリンとか同志○○とかで呼ばなければいけない。ソ連の悪口を言ったならば、懲罰委員会に

かけられるか、大衆集会に引き出され吊し上げられ、今後反ソの要注意人物として白眼視され、冷たい仕打ちを受けることになる。日本人同士が互いの足の引っ張り合いというか、醜い姿になったのである。

こうして、強制労働と共に精神的苦痛も並大抵のものではなかった。夏に入ったある日、君はハラシヨラポーターだから、チタ市へ行って共産主義の勉強をしてこいと言われたので、この収容所において、肉体的にまた精神的につらい日を送るよりは楽ではないかと甘い気持ちで引受けた。

約一カ月間、チタ市に受講に行くことに決定して出発した。だが、行ってみて驚いたことは、重労働のつらさとは意味の異なる精神的苦痛というか、針のむしろにいるような気持ちだったことは忘れない。朝早くから夜は遅くまで、それに日本人の講師で、今まで地下活動をしてきたような人物で、日本の封建時代から資本主義、軍国時代に移行した顛末を徹底的に分析した話、また搾取階級などについてのこと、社会主義が歴史の必然性からみても共産主義に移行するのは時間

の問題であると説く。さらに、共産主義、マルクスからレーニン時代の推移、ボルシェヴェーキ党史とか、我々が聞いたとて分別がつかないような話に加えて矢継ぎ早の質問攻めに発言を求められたり、また一方では赤旗の歌やインタナショナルの歌で氣勢を上げねばならず、精神的に本当につらく、苦しい一カ月間だった。

ようやく講習が終わり収容所に帰ると、同志の数が少なくなっているのに気づいた。同郷出身の懐かしい塚原、石田もいない。何が起こったのだろうかと聞いてみるとダモイしたと聞き残念でならなかった。私も講習に行っていなかったら、その組に入って共に帰国できたろうにと悔やんだ。

時既に、七月の末ころ、やがてあの寒い冬が間近に迫っており、今年も帰ることはできないのだろうか、一人悩んでもしよせん無駄で、元通りのノルマに追われた重労働の日々が続いた。

昭和二十三年九月のある日、現在地の収容所は閉鎖して全員日本へ帰る話が流れ始めた。我々はまたソ連

独特の嘘話であろうと半信半疑でいた。実はこれが事実で、嘘から出た誠か、直ちに帰国の準備をするように命令が出たので、天にも昇るようなとはこのことか、嬉しさいっぱいだった。その夜はなかなか眠れずに、懐かしい故郷の山河、父母、兄弟、近所の人たちのことなど思い出し、また、生きて虜囚の辱めを受けて帰る今の状況は、いかがにと、あれこれ思い浮かべているうちに夜もふけ、用便に所外に出ると、ちょうど顔見知りのソ連の下士官に出会った。彼がいうには、明日はいよいよダモイだな、空を見て美しい月だろう、日本にはこんな月はないだろうから、よく見て帰れとの意味のことを言ってダスピダーニア（さよなら）と別れる。日本でいう中秋の名月ではなかるうか、それにしても日本にはないとは宇宙の大自然を理解していないなあと思ひ眠りについた。

いよいよ日本へダモイの朝がきた。この時がいづか来るものと希望を持ち続け、かねてから抑留中亡くなった戦友の住所、氏名を記録して、日本へ帰国できたら遺族に状況説明し、墓参することに決心していた。と

ころが帰国の注意事項によると、不法な物品（秘密文書等）を所持していたら、ダモイの中止はもとより、軍事裁判にかけられ永久に帰国させないとの厳しい達しがあったばかりであり、どうしようかと迷う。

そこで、自分一人ばかりか他人にも影響を及ぼすかもしれないという不安もあり、早朝、監視兵の許可を得て、収容所から五百メートルの位置に建立していた連隊長青木大佐の直筆による「大日本軍勇士の墓」に参り、ダモイ報告と黙祷をして、持っていた住所録をその一隅に埋め、後ろ髪を引かれる思いで墓地を後にした。そして戦友同志と共に三年間、生き地獄のような生活と重労働に耐え忍んだ収容所を後にし、ジプヘイゲンの駅に向かい、またも有蓋貨車の人となり、ナホトカに乗り進んだ。

途中、ハバロフスク駅頭で、同邦同志の歓送をうけ、ついにナホトカ駅に着く。ここは第一から第四分所まであり、その分所を順当に通過しなければ乗船許可が出ないとのことで、いろいろな心配したが、案外容易に帰還手続を完了することができた。

既に入港していた復員船「高砂丸」を駆け上るよう
にして乗船した。私は船倉付近の客室らしきところに
横になり、瞑想し、いろいろのことを思い浮かべる。

船はどうやら棧橋を離れたようである。ふと甲板が
急に騒がしくなったので、何事ならんと甲板に上がっ
てみると、二名の者が中央に引き出され、殴る、蹴る、
打つの乱暴、そして海に放り込めと言う者もいる。よ
く見ると、二人はかつて収容所でソ連の機嫌をとるた
め、ファシスト委員長として威張って、我々同胞に対
して非道な仕打ちをしてきた、東北の〇〇と島根の〇
〇である。これは当然の報いであろうと、私は傍観し
た。

船は波静かなる日本海を日本本土に向かって進んで
いた。二日目ぐらいだろうか、甲板上にいた者が、
「オーイ、島が見えるぞー」と叫ぶ声に一斉に甲板に
上がってみると、まさしく夢にまで見た母国、山と緑
の美しい日本の姿であった。おそらくこの時の感情た
るや、一生忘れることはないだろう。

舞鶴港棧橋に横づけとなり下船開始、ついに日本の

土を下関港以来、実に六年ぶりに踏むことができ、誠
に感無量のものがあつた。上陸すると、まず、米軍に
よる検疫というか、素っ裸となり、白い粉末（DDT）
の噴出している中を通り、次の部屋で下着類から全部
新品に着替えて、実に心身共に生まれ変わったような
気分になった。そして、米軍のMPの設問等があり、
待ちに待った食膳にありつく。日本酒と、何年ぶりか
のお米の御飯、日本料理、ありがたく感謝の気持ちいっ
ぱいでいただいた。

昭和二十三年十月二十三日、中支戦線から酷寒シベ
リアの地で飢えと重労働に耐え筆舌に尽くすことので
きない苦しみを味わい生死を共にした戦友たちと、再
会を期し、別れを惜しみながら、各々の故郷へ帰るこ
とができた。捕虜の三カ年間で面映い気持ちはあつた
が、何とか元気で健在であつた父母そして兄弟に懐か
しく対面する。

人生で一番楽しいはずの青春時代、六年有余の歳月
の空白、どのようにして挽回すべきか、全く別の世界
にいるようで全く見当がつかない。

ちょうどそのころ、兄が製材所で働いていたので、私もその事業所で製材工として勤める。三年くらいしてから木材業を自営したが、資金難のため廃業して、県内大手の建築会社へ入社し、木材担当や、営業関係に携わり、最終的には取締役になり、二十六年間勤務して退社した。

現在は、長男夫婦と同居しながら、細々ながら家内と共に健康で生活している。目下の楽しみと言えば、中支戦線で生死を共にした戦友、そしてシベリアで飢えと寒さと重労働に耐えた同志と、年一回戦友会で苦難の昔話することである。

シベリア抑留記

福島県 壁 果 一 弥

出生から入隊

大正十二年九月四日、旧田村郡中妻村大字西方字後作一五三番地、壁果家の長男に生まれる。高等小学校

卒業後、学校法人安積学館へ入学、同校を卒業する。家業の農業に従事、食糧増産に励む、傍ら青年学校に入校、軍事訓練など学ぶ。

昭和十八年に徴兵検査を受け甲種合格となり、昭和十九年三月、東滿綏芬河の満州第二国境守備隊第二中隊に入隊する。六カ月の初年兵教育終了後、部隊内で集合教育を二カ月、同年十二月、旅順の下士官候補者教育隊に入隊する。前期三カ月は歩兵重機関銃の一般教育、後期三カ月は専ら挺身奇襲攻撃の訓練演習であった。

日露戦争の激戦地二〇三高地なども演習地であったが、ロシア軍が構築した要塞の堅固さに驚いたものであった。

ソ連侵攻前後、終戦、シベリア抑留地への旅

昭和二十年五月、教育隊の教育終了。東滿城子溝で新設された第二百二十八師団挺身大隊に転属になる。その後、老黒山に移り、日夜挺身奇襲の訓練演習に励む。昭和二十年八月九日早朝、突如ソ連軍の侵攻により、部隊は予定陣地に向かい老黒山を出発、間島省頭道溝